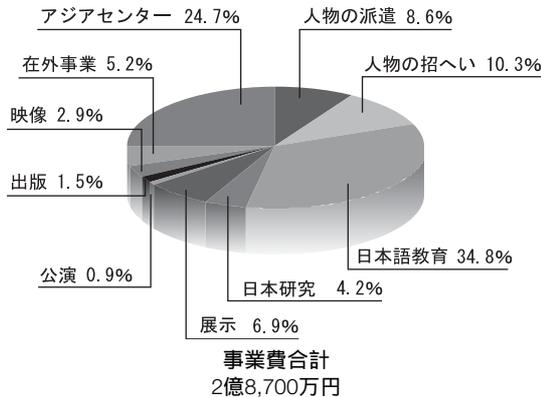


南アジア

概要



南アジアにおける事業実績額は2億8,700万円であった。国別では、インドにおける事業実績額が1億7,100万円でもっとも多い。分野別では、日本語教育、人物交流、アジアセンター事業が本地域における事業の柱となっている。

日本語教育では、インドおよびスリランカに長期派遣している専門家を中心に、各種研修、教材寄贈、弁論大会等の支援を行なった。とくにニューデリー事務所付アドバイザーは、近隣の南アジア諸国も視野に入れ、教師ネットワークの形成に努めている。

芸術交流分野では、インド、パキスタン、スリランカ、バングラデシュ、ネパールの演出家による共同制作「南アジア演劇プロジェクト」を開始した。基金は長年にわたりアジア現代演劇の紹介に努めると同時に、アジア域内の演劇交流とアジア発の文化創造を目指して共同制作に取り組んでいる。本年度は、2004年秋の上演に向けて各演出家が意見交換を重ね、東京でそれぞれの作品を紹介した。また、「日本の版画1950 - 1990展」、「こけし展」を各国に巡回したほか、第11回バングラデシュ・アジア・ピエンナーレに参加した。日本国内におけるアジア紹介としては、美術セミナー「アジアのアヴァンギャルド」のパネリストとして、スリランカからジャガト・ウィーラシンハ氏を招へいした。

知的交流分野では、アジア・リーダーシップ・フェロープログラム、「日印仏教哲学セミナー」、「日印作家キャラバン2003」等を実施した。

海外事務所報告

インド

ニューデリー事務所

1. 概況

政治面では2003年12月、国民会議派が政権を担うラージャスタン州、マディヤ・プラデシュ州、チャティスガル州およびデリー準州の4州で州議会選挙が実施されたが、デリーを除いた3州でインド人民党が勝利を収めた。州議会選挙での勝利、好調な経済成長などを背景とし、バジパイ政権は任期満了(2004年10月)を待たず下院総選挙実施の意向で、2004年2月にカラーム大統領は下院議会を解散した。

外交面において中国との関係はやや改善され、とくに経済関係を中心に関係が拡大しつつある。6月にバジパイ首相が中国訪問し、「印中関係および包括的協力の原則に関する宣言」を発売したほか、10月および2004年1月には国境問題に関する特別代表者会合が開催された。

パキスタンとの関係は4月のバジパイ首相の友好的な発言以来、印パ両国は大使の交換、両国間バス、鉄道、航空路など交通が再開し、関係改善に向けた前向きな動きがみられている。2004年1月には約2年半ぶりの印パ首脳会談が実現した。

2. 日本との文化交流事業

デリーでは2003年9月にホンダのロボット“アシモ”発表会が日本大使公邸で行なわれ、日本の最先端技術に関心の高いインドの科学技術関係者、文化関係者らが数多く集まった。

11月にはデリー、北京、ソウル、東京の4都市が参加して第2回アジア舞台芸術祭が実施され、室伏鴻氏、黒沢美香氏、川口隆夫氏による現代舞踊公演およびワークショップを行なった。

2004年2月にはアジア仏教者会議、3月には世界バンブー会議が催され、それぞれ日本から仏教関係者、竹に関する研究者や芸術家などが参加した。

日本語教育分野では、インドの大学レベルにおいてデリー大学、ジャワハルラル・ネルー大学を中心に、パナース・ヒンドゥー大学、ヴィシュヴァ・パーラティ大学、ブネー大学、バンガロール大学などの地方大学でも日本語教育を行なっており、学生や社会人の中で高い人気を得ている。近年のインドIT企業の隆盛および日本との経済関係の深まりとともに日本語教育への需要も高まっており、このような状況のもと、インド政府自らも日本語学習者を支援する補助金制度の実施を開始した。

3. ニューデリー事務所の活動

<活動方針>

10億人を超える人口をもつインドにおいて、とくに国際的、国内的に影響力の強いエリート層、ミドルクラス、また次世代を担う若年層を主要ターゲットとし、地域的にはデリー、コルカタ、ムンバイ、チェンナイ、バンガロールなどの大都市を中心に、以下5点の活動方針のもとに事業展開している。

- ・知的交流、市民交流の強化
- ・急増する日本語学習に対する効果的対応
- ・伝統と現代のバランスのとれた日本像の形成
- ・映画上映などによる映像メディア交流の強化
- ・事業を実施する地域、対象となる層の拡大

<2003年度事業例>

● **学校における日本文化紹介**(2003年4月19日、シュリーマティー・ラーム・ラーティ・グプター女子短大/サハーランブル)
サハーランブルは、デリーから北に約200kmにある地方都市である。シュリーマティー・ラーム・ラーティ・グプター女子短大において学生および教師向けに折り紙・茶道・華道・日舞・習字などの日本文化体験講座を開いたほか、『菊次郎の夏』『羅生門』の映画上映会には学生、教師約400名が参加し盛況であった。

首都デリーにとどまらず、地方都市においても日本文化紹介事業を実施していくことは広大な土地と人口を抱えるインドにおいて欠かすことはできない。

● **現代舞踊公演**(2004年2月24日、スリ・ラム・センター/デリー、ムンバイ、チェンナイ、コルカタ)

山田せつ子&枇杷系グループの4名により、現代舞踊公演およびデリーを拠点とする舞踊グループ・プーミカとワークショップをおこない、公演内容は国営テレビでも紹介された。観客入場数は約350名程度に達した。

デリー市民および舞踊関係者にとって今回の公演は、2002年度東京コンテンポラリーダンス公演(基金主催)、2003年11月アジア舞台芸術祭での現代舞踊公演(東京都主催)につづく、日本の現代舞踊にふれる3度目の機会であり、市民のあいだで現代舞踊に対する理解が徐々に深まってきたといえる。

● **基金フェローコンファレンス**(2004年3月19日、インド国際センター/デリー)

過去に基金のプログラムにより日本を訪れた研究者、芸術家、日本語関係者などを招き、基金ニューデリー事務所開設10周年の記念コンファレンスをおこなった。まずパネリストによりインドにおける日本語、日本研究、知的交流、芸術などの状況が紹介されたのち、各分野における日本との関わりおよび本基金

が今後果たしうる役割などについて80名ほどの参加者で終日活発な議論が交わされた。

本コンファレンスは基金フェローの初回同窓会でもあり、今後も数年ごとに実施し、基金に提言などを行なえるような存在として根付いていくことが期待される。



基金フェローコンファレンス